

Gamyate, Gamyamāna, Gata, Agata

——『中論』Ⅱ, kk. 1-6 の一考察——

小 川 英 世

0. 本稿は、『中論』Ⅱ, kk. 1-6 において議論されている命題 *vākya*¹ {*gataṃ gamyate*}・*vākya*² {*agataṃ gamyate*}・*vākya*³ {*gamyamānaṃ gamyate*} について、命題論の観点からの定式化を試みるものである。この定式化によってこれらの命題が否定されるその論理は自ずと露わになる。『中論』Ⅱ, kk. 1-6 は、行為否定 (*kriyāpratiṣedha*)、厳密には「三時に互る行為の不成立」のモデルを提供するものであり、その意味でその否定の論理—*gamyamānagatāgata* の論理 (III-3, VII-14, X-13, XVI-7; VII-26)—を明確にすることは極めて重要である。

今西 [1987: 84] は、『中論』における「命題に関する哲学的思索の存在」を語り、立川 [1988: 208] によれば、「龍樹の考察対象は文章あるいは命題である」。本稿が採る命題分析の方法は、文 (命題) 派生のレベルにまで遡って命題を考察することである。Bhattacharya の一連の研究 [1980: 80-81] で明らかにされているように、月称はパーニニ文法学に精通しており、実際幾つかの概念を援用している。したがって、当該の命題の分析に際しては、その文 (命題) 派生の提示はパーニニ文法学の派生組織に基づく。

行為 (*kriyā*) は、それを実現する要素である *kāraka* と相関的であり、両者の間には *sādhyaśādhana* 関係がある [VPⅢ, *sādhana*, k. 1]。したがって行為が成立する場には、原理的に *kāraka* の参加が見いだされる。これが、行為否定が命題論の枠組でなされる根拠である。行為が成立する事態は、行為そのものを表示する項目と *kāraka* を表示する項目が共使用されることによって初めて表現可能なのである。行為をその本来の相である＜向実現相＞ (*sādhyatva*) によって表示するのは、動詞語根 (*dhātu*) に動詞接辞 (*tiñ←L*) が後続する項目 (*tiñanta*) である [VPⅡ, k. 195cd]。動詞接辞は、＜行為主体＞ (*kartr*) あるいは＜目的＞ (*karman*) という *kāraka* を表示し [P 3.4.69]、これらの *kāraka* は、その動詞語根に動詞接辞が後続する項目の共起項目 (*upapada*) によって限定され、特定される [P1. 4. 105-108]。

1. パーニニ文法学の派生組織に従い, vākya 1~3 を直接構成要素分析すれば以下ようになる。

1{gatañ gamyate}←{<√gam+Kta>+sU √gam+yaK+LAT}

2{agatañ gamyate}←{<nañ+<√gam+Kta>>+sU √gam+yaK+LAT}

3{gamyamānañ gamyate}←{<√gam+yaK+LAT>+sU √gam+yaK+LAT}

({gatam} 等の中性形表現は, ekaśeṣa 規則 P1. 2. 69 による)

√gam は「他動詞」(sakarmaka-dhātu) であり, 原理的に<行為主体>と<目的>を期待する。vākya 1~3 は所謂「受動態」表現 (karmaṇi prayoga) である。ここに<行為主体>は言及されていないが, 当然それは含意されている。今西 [1987] は, これらの表現を「非人称構文」として解釈するが, パーニニ文法学の派生組織からすればその解釈には聊か無理があるように思われる。

√gam が意味する「進行」(gati) は, 或る地点を離れて別の或る地点に到達するという, 離着陸の連続的な流れ [Helārāja on VP111, sādhanā, k. 135: tyāgo-pādānarūpavicchinna-pravāha] と捉えることができる。離陸のアスペクトを捉えて√gamは「去る」を意味すると言うこともできるし, 着陸のアスペクトを捉えてそれは「到達する」を意味すると言うこともできる。

さて<gata>は, √gam に kṛt 接辞 Kta が添加された語形であり, 当該文において Kta は, <目的>を表示し [P3. 4. 72], √gam の意味する進行行為が過去の時間領域に属することを表す [P3. 2. 102]。

nañ-tatpuruṣa [P2. 2. 6]<agata>に関しては, 否定辞 nañ の意味が問題となる。Mbh ad P 1. 4. 50 における<anīpsita>解釈に倣えば, paryudāsa の場合, <agata>は「gata 以外のすべて」, すなわち進行行為の<目的>のうち過去以外の時間領域に属する進行行為の<目的>を意味する。この場合には vākya 3 を別個に言明する必然性はなくなる。したがって当該の否定辞 nañ の機能は, <gata>に対して<反対>の関係にあるもの (pratipakṣa) を定立する prasajya-pratiṣedha であると考えられる。この場合<agata>は, 進行行為が未だ生じていず, それが未来領域に属することを表す。

<gamyamāna>は, その派生を示せば, √gam+yaK+LAT に分析される [yaK (P3. 1. 67); LAT→ŚānaC (P3. 2. 124)]。ところで, 定動詞形 {gamyate} もまた, 同じく √gam+yaK+LAT に分析される [LAT→te (P3. 4. 78)]。パーニニ文法学では, <gamyamāna>と {gamyate} は, 共に共通の始発連鎖から派生され, 意味的に等価である。この点が, 後論するように vākya3 の解釈上の重要

な鍵となる。当該文では LAT̥ は<目的>を表示し [P3. 4. 69], それが添加される動詞語根の表示する行為が現在領域に属することを表す [P3. 2. 123]。<gamyamāna>と {gamyate} は、共に現在領域に属する進行行為の<目的>を表示する。

さらに vākya1~3 の統語上の特徴について言えば、三文とも {X-sU (Nominative) gam-ya-te (LAT̥)} という形式を有する。人称系列接辞 (puruṣa) 選択規則 [P1. 4. 108] は、gam-ya-te の te (LAT̥) と共起項目の X-sU の X との間に sāmānādhikaraṇya (同一対象指示性) の関係があることを教える。<gata>等の共起項目は、te (LAT̥) が表示する<目的>—gamikriyā-karm an-gantavya—を特定しているが、その特定の原理は、「所去処 (去られるべきところ) を三時に配分すること」(立川 [1988: 205]) であることは言うまでもない。

2. vākya1~3 に見いだされるこの sāmānādhikaraṇya という統語関係に着目するならば、vākya1~3 は次のように定式化されよう。尚<目的>は<行為主体>と同様、行為の直接的な基体 (āśraya) [Kāśikāvṛtti on P1. 4. 45] である。

gamikriyā の<目的>Xに関して [<目的>=kriyāśraya]:

- ① Xは<gata>-vācya (bhūta-gamikriyā-viśiṣṭa) でありかつ同時に {gamyate}-vācya (vartamāna-gamikriyā-viśiṣṭa) である。
- ② Xは<agata>-vācya (bhaviṣyat-gamikriyā-viśiṣṭa) でありかつ同時に {gamyate}-vācya (vartamāna-gamikriyā-viśiṣṭa) である。
- ③ Xは<gamyamāna>-vācya (vartamāna-gamikriyā-viśiṣṭa) でありかつ同時に {gamyate}-vācya (vartamāna-gamikriyā-viśiṣṭa) である。

このような定式化によって、vākya1~3 の抱える問題点、すなわちそれらが否定される根拠が露わになる。月称は、vākya1~2 に関して virodha (PP on MMK, II-12, VII-14: atītavartamānāyor virodhaḥ, anāgatavartamānāyor virodhaḥ) [cf. PP on MMK, VII-26] を、vākya3 に関して gatāgatavyatiriktagamyamānānupalambha (=gamyamānābhāva) [cf. PP on MMN, VII-14, 26], gamanadvayaprasaṅga (→gantṛdvayaprasaṅga) [cf. PP on MMK, VII-26] を否定の根拠として明示しているが、その論理がここに明らかとなろう。

常套的な言語分類によれば、<gata>・<gamyamāna>・{gamyate} は kriyāśabda と呼ばれるものであり、行為を適用根拠 (pravṛttinimitta) とする。{gamyate} の適用根拠と<gata>等の適用根拠を単一の<目的>に関わるものとして捉えることによって、次のように言うことができる。

3. virodha vākya1~2 に関しては、定式①~②より、単一の〈目的〉に相関した行為が過去に属する (bhūta=atīta) と同時に現在に属し (vartamāna), また未来に属する (bhaviṣyat=anāgata) と同時に現在に属する (vartamāna) という構造が看取される。何故矛盾 (virodha) なのか。これは現在を承認することにおいて成立する。言語表現上は、行為が開始されて未だ終結していない時間範囲を以て「現在」と呼ばれる (vt. 3 ad P3. 2. 123: nyāyā tv ārambhānapavargāt)。したがってある行為が、過去に属すると同時に現在に属するということは、その行為がすでに終結していると同時に終結していないということであり、また未来に属すると同時に現在に属するということは、その行為が未だ開始されていないと同時にすでに開始されているということである。これは明らかに矛盾律から認められない。この際、単一の〈目的〉に過去に属する行為と現在に属する行為という二つの異なる行為が存すると言うことはできない。なぜなら、Bhattacharya [1980] に指摘されるように、kāraṇa 理論に従えば、行為の差異化によって〈目的〉という kāraṇa も差異化されざるを得ないことになるからである。

4. <gata> (<agata>) と表現されるものは {gamyate} とは表現されないけれども、<gamyamāna> と表現されるものは {gamyate} とも表現される。しかし両項目が共表現された vākya3 に関して定式③が明らかにするのは、vākya3 が、{karaṇīyam kāryam} [cf. Vyāḍi-paribhāṣā 51] と同じように、適用根拠を同じくする項目の反復表現、すなわち tautology 表現 (uktārthaprayoga) であるということである。

4. 1. gatāgatavyatiriktagamyanānupalambha (-gamyamānābhāva)
 <gamyamāna>あるいは {gamyate} と表現される事象の非認識 (非存在) を以て vākya3 そのものは否定される。そしてこのように表現される事象は、1) 現在または現在に属する行為 (適用根拠), あるいは2) そのような行為の〈目的〉 (指示対象, 定式3 X) が否定されることによってその存立が否定される。月称は2) の観点から否定の論理を展開しているが、その論理は、Ruben [1928: 189] に指摘され、金倉 [1942] に敷衍されているように、NSII. 1. 37(39) とパラレルであり、Mbh ad P 3. 2. 123 における1) の観点からの現在時制表現の不成立の議論にその原型が見いだされる。この議論においては行為の現在性の論理的不成立と現在における行為の非認識から現在時制表現の不成立が主張されているが、その論理的否定のパターンは、バルトリハリ [VPiII, kāla, k. 85] が「過去事象=有 (sat), 未来事象=非有 (asat), 現在事象=有非有 (sadasat), その矛盾

律に基づく否定」として提示するものであり、これは月称のものと同一である。

4. 2. **gamanadvayaprasaṅga (gantṛdvayaprasaṅga)** パーニニ文法学派にとって言語表現上の行為とは、結果産出に向けて時間的に継起する部分的行為の集合であり（この点で行為は有非有なる相を有する）、したがって言語表現上の「現在」は既述のようなある幅を付与される。前掲 Mbh における現在時制表現の正当化はこの観点からなされている。『中論』Ⅱ, k. 2 は <gamyamāna>あるいは {gamyate} と表現される事象を *ceṣṭā*（「運動」）の導入によって確立する。これは進行行為をその部分的行為 *ceṣṭā* の連続として捉えたものであり、パーニニ文法学派の現在時制表現の正当化の論理に通ずるものである。

<gamyamāna>あるいは {gamyate} と表現される事象が存立する場合には、*vākya*3 に関して、tautology 回避の努力が払われねばならない。それは、<gamyamāna>, {gamyate} いずれか一方の適用根拠のφ化が両者の適用根拠の差異化によって可能である。しかし、適用根拠のφ化によっては、いずれか一方が *kriyāśabda* でないことになる [kk. 3-4]。このことは月称 [PP on k. 4] の <gamyamāna>の名称化 (*saṃjñābhūta*) の説明に端的に現われている。一般に名称語 (*saṃjñāśabda*) はその対象に属する属性を適用根拠としない。一方、適用根拠の差異化によっては、*gamanadvaya* の想定から、言うまでもなく、*kāraka* 理論に基づき *gantṛdvaya* が帰謬することになる [kk. 5-6]。

5. *vākya*1~3 (*vākya* {X-sU gam-ya-te}) の不成立は、X-karmaka-gamikriyā (X を<目的>とする進行行為) の否定を導く。進行行為に相関した<目的>として存立するものがない時、「どこにも行かない」のであり、このように表現される場において進行行為の成立はない。

文献 Ruben, Walter [1928] *Die Nyāyasūtra's Text, Übersetzung, Erläuterung und Glossar* (AKM18-2). 金倉円照 [1942] 「時間論の一資料——特に『マハーバーシュヤ』の一節について——」『宗教研究』第四年第二・三輯。Bhattacharya, Kamaleswar [1980] "Nāgārjuna's Arguments against Motion: Their Grammatical Basis," *A Corpus of Indian Studies: Essays in Honour of Professor Gaurinath Sastri*. [1980-81] "The Grammatical Basis of Nāgārjuna's Arguments: Some Further Considerations," *Indologica Taurinensia*, VIII-IX. 今西順吉 [1987] 「言語世界の構造とその破壊——『中論』の言語哲学について——」『印度哲学仏教学』第2号。立川武蔵 [1988] 「月称註『明らかな言葉』二章和訳・解説(一)」『成田山仏教研究所紀要』第11号。
 <キーワード> 『中論』, *Mahābhāṣya*, *kriyā*, *kāraka*, 命題論

(広島大学助手)